1-5-3-2

当院SCUにおける離床検知センサー全例導入の転倒予防効果と今後の課題

川井（かわい）　早紀（さき）、志賀　裕二、若林　伸一、溝上　達也
医療法人翠清会　梶川病院　看護部C病棟

【目的】当院の脳卒中集中治療室（SCU）では、患者の安全を確保するために同意の得られた患者全員に離床検知センサーを装着する取り組みを2017年からおこなっている。本研究は、転倒・転落予防におけるその取り組みの有効性を検証し、今後の安全対策に役立てることを目的とした。
【方法】離床検知センサー全例導入前の2014年1月1日から2017年1月31日にSCUへ入院した患者1607名と、導入後の2017年3月1日から2020年3月31日にSCUへ入院した患者1819名の2群について患者の単独行動により転倒・転落した患者の比率を比較・検討した。集計には事故報告書を利用した。
【結果】離床検知センサー全例導入前の群では単独行動により転倒・転落した患者は7名、導入後の群では3名であった。2群の比率の差の検定をおこなったところ、$p > 0.05$となり、有意な差はみとめなかった（$p=0.143$）。
【考察】離床検知センサー全例導入によって転倒・転落患者数に有意な差が出ると予測していたが、今回の検討では有意な差はみとめなかった。これは、SCU入院患者数という母数に対して転倒患者数がきわめて少ないため、今回の調査では転倒患者数の差が明確にならなかったものと考えられた。しかし、実際の転倒・転落件数は減少をみとめており、また離床検知センサーの作動頻度により、患者が安静指示を守れるか、単独行動がないかを評価できている側面があるため、離床検知センサー全例導入の試み自体は継続しても差し支えないと考えた。今後の課題としては装着による患者のストレスが最小限になるよう工夫する必要がある。
【まとめ】当院SCUにおける離床検知センサー全例導入前後では、転倒・転落件数に有意な差はみとめなかったが、入院後の安静確保や患者状態の把握に役立っている側面があるため、患者のストレスに配慮しつつ全例導入を継続していきたい。